

源氏物語と貴種流離譚

杉浦 一雄

目次

- 一 序
- 二 始祖としてのスサノヲ
- 三 貴種流離譚の原点
- 四 罪と流離
- 五 罪過の祖
- 六 罪の二重構造

一 序

平安時代における貴種流離譚の展開は、『古事記』『日本書紀』の影響を受けながら文学的に深められていった。九世紀の後半から十世紀にかけて、現存最古の物語である『竹取物語』が登場し、物語文学の時代が花開いてゆく。『竹取物語』といった伝奇物語だけでなく、現存最古の歌物語である『伊勢物語』、わが国最初の長編作り物語である『宇津保物語』などの傑作が次々と書かれ、文学性の高い貴種流離譚が多様

な展開を見せていったのが平安時代だといえよう。その中であって、それらの文学を集大成し、物語文学の頂点に立ったのが『源氏物語』である。上代に源を発する貴種流離譚の伝統は様々な流れを取り込みながら、『源氏物語』という大河となつて日本文学の中にその雄姿を現したのであった。

私見によれば、『源氏物語』の根底には、貴種流離譚の祖であるスサノヲの尊がモデルとして踏まえられていると考えられる。つまり、当時最新の物語である『源氏物語』は、スサノヲの尊という貴種流離譚の原点に回帰することによって、貴種流離譚そのものを包括する物語として成立したということができよう。その意味で、『源氏物語』はただ単にわが国を代表する古典文学の傑作というだけでなく、貴種流離譚の文芸的帰結であり、その最高峰に位置する作品であるということができるのである。

そこで、ここでは、平安時代における貴種流離譚の典型である『源氏物語』を取り上げ、主人公光源氏の流離をその要因となつた「罪過」の側面から考察してみようと思う。

二 始祖としてのスサノヲ

これまでに私は、『源氏物語』第一部が『日本書紀』巻第一を骨格として創作されたのではないかということを述べてきた。すなわち、光源氏はスサノヲの尊をモデルとして造型され、『源氏物語』第一部はその主要な人物から主要な出来事に至るまで『日本書紀』巻第一「神代上」におけるスサノヲの尊をめぐる神話を典拠として創作されたのではないかと述べてきたのである(一)。

それにしても、紫式部は何故にスサノヲの尊をモデルとし

た物語を執筆することになったのであろうか。その理由には、スサノヲの尊の果たす文学史上の意義が大きく関わっていたと思われる。それは常に「始祖」としての意義だったのではなからうか。

まず、スサノヲの尊は「和歌の祖」として位置づけられる。紀貫之は『古今和歌集』「仮名序」のなかで、スサノヲの尊について次のように述べている。

この歌、天地のひらけ初まりける時よりいできにけり。しかあれども、世に伝はることは、久方の天にしては下照姫に始まり、あらかねの地にしては、素盞鳴尊よりぞ起りける。ちはやぶる神代には、歌の文字も定まらず、素直にして、言の心わきがたかりけらし。人の世となりて、素盞鳴尊よりぞ三十字、あまり一文字はよみける。〔古今和歌集〕「仮名序」(2)

この歌というものは、天地創成の昔からできていた。しかしながら、後世に伝わっているのは、天上界では下照姫の歌に始まり、地上においてはスサノヲの尊の歌から起ったのである。神代においては、歌の音数も一定せず、表現もありのままで、歌の意味も分かりかねるものだったようである。ところが、人の世となつて、スサノヲの尊の時からはじめて三十一文字の歌を詠むようになった、というのである。

ここで紀貫之は、和歌というものはそもそも遠い神代に始まったとして、三十一文字の始原をスサノヲの尊に求め、スサノヲの尊を和歌史の第一頁を飾る和歌の嚆矢と定めたのである。紫式部は、紀貫之による「和歌の祖」としての位置づけに敬意を払っていたことであろう。しかし式部は、それに

止まらず、スサノヲの尊に対してさらに別の評価を与えたのであった。

紫式部は、スサノヲの尊に「異郷の祖」としての側面を見出したのである(3)。

日本神話によれば、スサノヲの尊が「根の国」に渡りたいという願望を懐いていたことは、その登場と共に語られている。天下の統治を放棄し、年たけるまで泣きつづけている訳を父神に問われたスサノヲの尊は、

「吾は母に根国に従はむと欲ひて、只に泣かくのみ」

〔日本書紀〕巻第一「神代上」、第五段一書第六(4)

と答えている。私は亡き母のいます根の国に行きたいと願って泣いているのです、というのである。

「根の国」に渡ることをひたすら希求したスサノヲの尊は、結果的にそれを果たし、「根の国」という異郷の主宰神となっている。

『古事記』には、「根の国」に棲むスサノヲの尊が、八十神に迫害されてやって来た大国主の神に対して試練を施し、葦原の中つ国を統治するに相応しい資格を獲得させて再生復活させる過程が描かれている。つまりスサノヲの尊は、「根の国」という神話的世界を統治する異郷の「祖」として君臨しているのである。

しかし、紫式部がスサノヲの尊に見出した最も重要な始祖としての功績は、「異郷の祖」というだけではなく、スサノヲの尊が「物語の祖」として位置づけられるという側面ではなかつたろうか(5)。

『日本書紀』巻第一「神代上」を概観すると、スサノヲの尊は「神代上」全体にわたってその活動が描かれ、ほとんどすべての出来事がスサノヲの尊に関わっていることに気づかされる。スサノヲの尊はその誕生から語り出され、罪を着せられ、高天原を追放され、流離を余儀なくされながらも、八岐大蛇を退治し、姫と結婚し、そののち、ついに根の国へと向かうといったように、誕生、流離、結婚とその半生の大部分が描きこまれている。つまり、スサノヲの尊はアマテラス大神に匹敵する、いやむしろある意味ではアマテラス以上に日本神話を代表する存在であることが知られるのである。

そこで紫式部は、スサノヲの尊を和歌の歴史ではなく、物語の歴史の中に位置づけようと試みたのではなからうか。文学史上におけるスサノヲの尊の価値は、ただ単に三十一文字をはじめて詠んだという一点にのみあるのではない。神話が、広義の物語であるとするならば、スサノヲの尊は物語の源流にそびえ立ち、物語の典型を形づくった、物語史上最初の主人公だったといっても過言ではなからう。紀貫之が和歌の元祖として位置づけたスサノヲの尊を、式部は、「物語の祖」として新たに捉え直そうとしたのである。日本の物語は、スサノヲの尊を主人公として本格的に始まった。スサノヲの尊は「和歌の祖」であるとともに「物語の祖」でもある。式部は、「和歌の祖」として評価されていたスサノヲの尊に対して、物語の扉をはじめて押し開いた「物語の祖」としてのスサノヲ像を堂々と対峙してみせたのであった。

しかも、スサノヲの尊は貴い血筋に生まれながら罪を着せられて、流離を経験するという貴種流離譚の基本的な要素をすべて兼ね備えた、最初にして最も典型的な実例だといってよい。ということ、スサノヲの尊は「物語の祖」というだ

けでなく、貴種流離譚の始祖としての地位をも兼備しているということができよう。

すなわち、スサノヲの尊は貴種流離譚の始祖、つまり「流離の祖」でもあったのである。

ところが、ここに少々奇異なことがある。貴種流離譚を提唱した折口信夫氏の著作に貴種流離譚としてのスサノヲの尊について言及したものが見当たらないという事実である。

そもそも貴種流離譚という用語は折口信夫氏の造語とされている。折口氏は大正七年十月発表の「愛護若」において「貴人流離譚」としてはじめてこの概念を提示した。その後、大正十三年十月の「国文学の発生(第二稿)」において「貴人流離譚」を「貴種流離譚」に改称し、話型としての学術用語を確立している(6)。折口氏は昭和二十七年の「真間・蘆屋の昔がたり」という論文の中で「貴種流離の話といふものは、実に沢山ある」と記すに至るまで、多くの論文において貴種流離譚を論じている。折口氏がこれらの論文の中で貴種流離譚の具体的な例として挙げているものを列挙してみると、愛護の若、天武天皇、億計・弘計の王、石上乙麻呂、麻績の王、木梨の軽皇子、中臣宅守、源融、小野篁、在原行平、光源氏、少彦名、蛭子、俊蔭、俊蔭女、中将姫、岩屋の草子、照手姫、安寿・厨子王、源義経、磐姫皇后、大姉皇女・十市皇女、斎宮、真間の手児奈、芦屋のうない乙女、など広範囲に涉っていることがわかる。

ところが、まことに意外なことに、この中にスサノヲの尊の名は見えていないのである。因みに『折口信夫全集』の「索引」によつて「スサノヲ」関係の語を検索してみても同様で、少なくとも折口氏は貴種流離譚の実例としてはスサノヲの尊を論じていないことが判るのである。折口氏をはじめ

からスサノヲの尊を貴種流離譚の範疇から除外していたとは考えにくい。むしろ、スサノヲの尊が貴種流離譚の範疇に属することは誰の目にも明らかなので、敢えて論ずるまでもないかと判断したのかも知れない。

だが、スサノヲの尊に対する後の文学史上の重要性に鑑みるならば、折口氏が貴種流離譚を論ずるにあたってスサノヲの尊の名を逸したという一事は、貴種流離譚の歴史の上で少なからぬ禍根を残すことになったのではなからうか。なぜなら、スサノヲの尊こそ貴種流離譚を論ずるにあたってまず第一に論ずべき、最も不可欠な存在だったからにはかならない。

三 貴種流離譚の原点

貴種流離譚を語る上で見過ごすことのできない記述が『源氏物語』のなかにある。「総合」の巻に描かれた「総合」という名の「物語合」である。ここには、物語の歴史が通観され、貴種流離譚の伝統に則った物語が歴史的に位置づけられた上で、その原点にスサノヲの尊が鎮座していることが示唆されている(一)。

「総合」の行事は、「藤壺の御前での総合」と「帝の御前での総合」の都合二回催されている。

まず、「藤壺の御前での総合」が、左方と右方とに分けられて始まる。それぞれが自慢の作品を提示し、具体的には二番がつかわれ、その優劣が争われている。最初に、左方からは『竹取物語』、右方からは『宇津保物語』が提示され、次に、左方からは『伊勢物語』、右方からは『正三位』がそれぞれ提出されて競われている。左方は「いにしへの物語」、名高くゆゑあるかぎり」、つまり昔の物語で、名高く趣の深い

物語ばかりが集められ、右方は「そのころ世にめづらしくをかしきかぎり」、つまりそのころ世間で目新しくもて囃されている物語ばかりを選んで提示しているという。換言すれば、「古物語」の代表的作品と「今物語」の代表的作品とが対比されていることが解るのである。紫式部は古今の物語を対比することによって、物語を歴史的な視点から捉え、それぞれの作品を物語史の中にきちんと位置づけようと試みているのである。

さて、こうして「藤壺の御前での総合」は決着がつかないまま、日時と場所とを改め、「帝の御前での総合」へと持ち越されることとなった。ここでもさまざまな作品が提出され、数々の議論が繰り広げられたが、いずれ劣らぬ名品揃いに結局勝敗がつかないままとうとう夜を迎えてしまう。このとき、最後の場面で持ち出されたのが光源氏の描いた「須磨の絵日記」であった。最後の最後に、「須磨の絵日記」が提出されたことよって、それまで劣勢であった左方が見事に勝利し、すべての決着がつけられるという結末になっているのである。

「総合」の最後に光源氏の描いた「須磨の絵日記」が登場し、それが勝利するというのは、『竹取』『宇津保』『伊勢』『正三位』をはじめとする物語文学の頂点に『源氏物語』を位置づけようとする紫式部の意図によるものであろう。つまり紫式部は、物語の伝統的な系列の中に『源氏物語』を位置づけ、物語文学の原点『竹取』に発する文学伝統の正当な継承者であり、のみならず物語全体の頂点に立つ物語こそ『源氏物語』であることを堂々と主張して憚らなかつた。その仮託的、すなわち物語的表現こそ「総合」における「須磨の絵日記」の勝利だったと考えられるのである。

それにしても、『源氏物語』は何故『宇津保』『正三位』の

系列ではなく、『竹取』『伊勢』の系列に位置づけられているのであろうか。

まず、すぐに気づかされるのは、これらの物語がいずれも折口信夫氏の説く貴種流離譚の範疇に属しているという点である。

かぐや姫も、在原業平も、そして光源氏も貴い血筋に生まれるながら流離を経験している点で本質的に一致している。しかしながら、このことは何も『竹取』『伊勢』『源氏』に限ったことではない。実際、「総合」で右方から出された『宇津保』についても「流離譚」の要素を窺い知ることが可能である。『宇津保』の俊蔭は、若くして遣唐使に選ばれ渡航するが、あいにく遭難して異国に漂着するなど文字通りの「流離」を経験している。同じく右方から提示された『正三位』については、詳しい内容が不明であるため断定こそできないが、さほど高貴な出自ではない「兵衛の大君」が、ついに「正三位」の地位に上り詰めるまでには、幾多の波乱を経験したであろうから、広い意味で「流離譚」の要素がなかったとも言いが切れない。ということは、紫式部は数ある物語の中から「流離譚」の要素を備えている物語をここに選び出していると言ふことができよう。物語そのものに深い知見と鋭い洞察力とを兼ね備えていたであろう紫式部にとって、物語がその本質において「流離譚」であるということは既に自明のことだったのであろう。紫式部はそれらの「流離譚」を二つの系列に分類し、『竹取』『伊勢』の系列に敢えて『源氏物語』を位置づけている。『宇津保』『正三位』のように富や名声、栄達などといった現世的価値を求める「流離譚」と、『竹取』『伊勢』のように現世的・世俗的価値に埋没することなく、「異郷」という別個の価値を求めようとする「流離譚」とに

大別し、「異郷をめざす物語」こそ、より本質的な物語であることを示そうとしたのである。

この「異郷をめざす物語」の系譜は、その端緒をスサノヲの尊に求めることができよう。スサノヲの尊は、天下を統治する立場にありながら、それを放棄し、「根の国」へと向かった神であった。すなわち、スサノヲの尊は、天下の統治という現世的・世俗的な価値ではなく、「根の国」という「異郷」にこそみずからの至上の価値を見出していたのであった。その点でスサノヲの尊の生き方は、『竹取』のかぐや姫に、『伊勢』の在原業平に、そして『源氏物語』の光源氏に貫道するものであった。

しかし、ここでとりわけ留意しなければならないのは、それらの流離に「罪」が深く関わっている点である。かぐや姫や在原業平が流離を経験するのは、「犯し」があつてのことであった。

かぐや姫を迎えに来た「王と覚しき人」は、竹取の翁に対して次のように語る。

「汝、幼き人。いささかなる功德を、翁つくりけるによりて、汝が助けにとて、かた時のほどとてくだししを、そこの年のごろ、そこの黄金賜ひて、身を変へたるがごとくなりたり。かぐや姫は罪をつくりたまへりければ、かく賤しきおのれがもとに、しばしおはしつるなり。罪の限りはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き嘆く。あたはぬことなり。はや返したてまつれ」

（『竹取物語』（8））

かぐや姫は、月の都で罪を犯したために、日本へと島流し

にされたのであった。ここには、かぐや姫が犯した罪の内容について明記されてはいないが、「流離」の原因がみずから犯した「罪」であることは明らかなのである。

在原業平もまた、「罪」と関わることによって「流離」を余儀なくされた人物である。

むかし、東の五条に、大后の宮おはしましける西の対に、すむ人ありけり。それを、本意にはあらで、心ざしふかりける人、ゆきとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。あり所は聞けど、人のいき通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなむありける。

〔伊勢物語〕第四段(9)

むかし、男ありけり。東の五条わたりに、いと忍びていきけり。みそかなる所なれば、かどよりもえ入らで、わらはべの踏みあげたるついひぢの崩れより通ひけり。(中略)二条の後に忍びて参りけるを、世の聞えありければ、兄たちの守らせたまひけるとぞ。

〔伊勢物語〕第五段)

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きに來けり。(中略)これは二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひいでたりけるを、御兄、堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて、内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人ある

を聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、後のただにおはしける時とや。

〔伊勢物語〕第六段)

むかし、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方にすむべき国もとめにとてゆきけり。

〔伊勢物語〕第九段)

在原業平は、清和天皇の後となった二条后高子との恋に身をやつし、一旦は盗み出すという暴挙にも出たが、結局思うにまかせず、それを原因とするかのようにみずから東国へと流離したと物語られている。

このように、貴種流離譚の核心には「罪」があり、その罪の償い、贖いとして位置づけられるのが「流離」なのである。すなわち、本来貴種は「犯し」があつて流離するというのが、少なくとも狭義の貴種流離譚の本姿、だつたはずなのである。

無論、光源氏の流離にもまた罪が深く関わっている。それゆえ、光源氏の罪の分析が『源氏物語』という貴種流離譚の解明にとつて不可欠の課題となるはずである。

罪と流離の淵源を求めてみれば、やはり『日本書紀』に記されたスサノヲの尊に行き着くことになる。スサノヲの尊は、「和歌の祖」であり、「異郷の祖」であり、「物語の祖」「流離の祖」でもありながら、罪の起源すなわち「罪過の祖」として位置づけることができる存在だからである。

貴種流離譚としてのスサノヲ神話に敢えて触れることになつた折口信夫氏にも、スサノヲの尊と罪との関係について

は繰り返し言及が見られる。折口氏は、罪の起源神としてのスサノヲの尊を流離よりも重く見ていたのかも知れない。

本来の貴種流離譚には罪が深くかわり、流離には贖罪としての意味があった。それゆえ、貴種流離譚の最高峰に位置する『源氏物語』もまた「罪」の意味を説明することによって、はじめて本来の姿を把握することができると相違ない。

四 罪と流離

貴種流離譚における貴種は、本来罪を得て流離する。それはすべての貴種流離譚が、「流離の祖」であるスサノヲの尊を始原としているからにはほかならない。貴種流離譚の典型である『源氏物語』もまたその例外ではない。しかし、それ以上、『源氏物語』は罪と流離とを不可欠の要素とすることを要請されている。なぜなら『源氏物語』は、ほかでもないスサノヲの尊をモデルとして成立した物語だからである。

光源氏の流離には、古来さまざまな准拠が指摘されている。例えば、小野篁、在原行平、菅原道真、源高明、藤原伊周、周公旦などがモデルとして名を連ねている(10)。しかし、それらのさらに根底にはスサノヲの尊をめぐる神話が踏まえられている。すなわち、光源氏の流離には高天原から放逐されるというスサノヲの尊神話が源泉となっておりと私は考えるのである。『源氏物語』は始祖としてのスサノヲの尊を平安時代に甦らせた物語なのであり、光源氏の罪と流離は、まさしくスサノヲの尊の罪と流離とを原型として描かれているのだ。

そこでここでは、『源氏物語』における光源氏の流離とその源泉である『日本書紀』におけるスサノヲの尊の流離とを

「罪」という側面から比較してみたいと思う。

アマテラス大神との誓約を終えたスサノヲの尊は、高天原において数々の悪事を働き、高天原を混乱に陥れてゆく。

是の後に、素戔嗚尊の為行甚だ無状し。何といへば、天照大神、天狭田・長田を以ちて御田としたまふ。時に素戔嗚尊、春には重播種子し、且其の畔を毀つ。秋には天斑駒を放ち、田の中に伏せしむ。復天照大神の新嘗きこしめさむとする時を見て、則ち陰に新宮に放戻る。

(『日本書紀』卷第一「神代上」、第七段正文)

スサノヲはアマテラスが御田としていた天狭田・長田に對して、春には一度播いた種の上にさらに重ねて種を播く「重播種子」をしたり、その畔を破壊する「畔毀」をし、秋には天斑駒を放ち田の中に伏せさせる「伏馬」をして農事の妨げをしたりした。またアマテラスが新穀を召される新嘗のちようどその時を見計らって、新嘗のために新造された神聖な祭場を排泄物で穢すという「放戻」をした、というのである。

こうしたスサノヲの乱行は、神衣を織っていた稚日女尊を損なうに至って頂点に達する。

是の後に稚日女尊、齋服殿に坐して、神之御服を織りたまふ。素戔嗚尊見して、則ち斑駒を逆剥にし、殿の内に投入る。稚日女尊、乃ち驚きて機より墮ち、持たせる梭を以ちて体を傷めて、神退りましき。故、天照大神、素戔嗚尊に謂りて曰はく、「汝、猶し黒心

有り。汝と相見えむと欲はず」とのたまひ、乃ち天石窟に入りて、磐戸を閉著したまふ。是に天下恒闇にして、復昼夜の殊も無し。

〔日本書紀〕卷第一「神代上」、第七段一書第一)

稚日女尊が齋服殿で神の御服を織っておられたのをササノヲの尊が見て、斑馬を逆剥ぎにしたのを御殿の中に投げ入れたところ、稚日女尊が驚いて機から落ち、手にしていた梭で身を傷つけて亡くなられてしまった。そこでアマテラス大神はササノヲの尊に向かって、「お前にはやはり邪心がある。お前にはもう会いたいとは思わない」と仰せになって、天石窟に入り、磐戸を閉じてしまわれた。そのため天下は常闇となり、昼夜の区別もつかなくなつた、というのである。

アマテラス大神による岩戸隠れの神話である。ササノヲの尊の悪事あまりにも甚だしかったために、アマテラス大神は自ら天石窟に入り、天下は暗黒となつてしまった。これによつて、ササノヲの尊は高天原での乱行にとどめをさすこととなり、高天原からの放逐を決定的としたのであつた。

これらの神話を源泉としながら、『源氏物語』は王朝の物語を創造していった。ササノヲの尊をめぐるこれらの神話は、『源氏物語』のいずれの部分と対応し、ササノヲの尊の乱行は『源氏物語』において一体どのように描かれているのであろうか。

藤壺の宮との密会で子をなした光源氏は、その後朝顔の齋院に言い寄り、朧月夜との危険な情事に身を任せ、その立場を危ういものにしていった。この常軌を逸したような行動こそ光源氏がなした乱行にはかならないのではなからうか。ササノヲの尊の悪行が、御田を破壊し、新嘗の祭場を穢し、神

衣を織っていた女神を損なうなどすべて神聖なものに対する冒瀆であつたように、光源氏の行動にも同様の要素が認められよう。神に仕える朝顔の齋院に言い寄り、帝に奉仕する朧月夜と関係をもつなどということは、不謹慎極まりない振る舞いに相違ない。すなわち、宮廷社会の秩序を大幅に乱し、禁忌を破壊した光源氏の乱行は、ササノヲの尊のそのように、神聖なものへの侵犯という側面をもっていたのである。

この乱行が決定的となつたのは、光源氏と朧月夜との密会が露見してしまつた時であつた。ササノヲの尊が高天原からの追放を決定的にしたのが、神事に奉仕していた稚日女尊を損なうことであつたように、光源氏が流離へと追い込まれた直接の原因が、女官として朱雀帝に奉仕していた朧月夜と関わることだつた。ここには構想の一致を見ることができよう。

そもそも光源氏が朧月夜を知つたのは、春二月宮中で催された南殿の桜を賞でる宴の日であつた。夜が更け、宴は果てたが、酔いのさめやらぬ光源氏は、藤壺の宮への思いを募らせて宮中を徘徊していた。そんな折、たまたま出遭つた女性が朧月夜であつた。光源氏の強引さに押されて、一夜を過ごしてしまつた朧月夜は、その後人知れず悩みがちとなる。それというの、朧月夜には春宮入内の縁談が進み、それが直前に迫っていたからである。花の宴から一月後、右大臣邸で開かれた藤の宴で二人は再会、それから二人は密かに逢瀬を重ねていった。右大臣方では、朧月夜が光源氏にばかり思いを寄せているのを知りながらも、朱雀帝の許に入内させようと躍起になつている。そんな矢先、二人の関係が露見してしまう。

光源氏と朧月夜との関係が露見したのは、朧月夜が病を理

由に里下がりしたのを見計らつて、光源氏が無理な逢瀬をした時であつた。雨が俄かに激しく降り、雷がひどく鳴り騒ぐ夜明け方、人の出入りが多く、女房たちがうろたえて大勢集まつているため、源氏は朧月夜のもとから出るに出来ない状態となる。そんな折、父である右大臣が娘の身を案じてやつてきてしまふ。

尚侍の君いとわびしう思されて、やをらみざり出でたまふに、面のいたう赤みたるを、なほなやましう思さるるにやと見たまひて、「など御気色の例ならぬ。物の怪などのむつかしきを。修法延べさすべかりけり」とのたまふに、薄二藍なる帯の御衣にまつはれて引き出でられたるを見つけたまひてあやしと思すに、また畳紙の習などしたる、御几帳のもとに落ちたりけり。これはいかなる物ともぞと御心おどろかされて、「かれは誰がぞ。けしき異なる物のさまかな。たまへ。それ取りて誰がぞと見はべらむ」とのたまふにぞ、うち見返りて、我も見つけたまへる。紛らはすべき方もなければ、いかがは答へきこえたまはむ、我にもあらでおはするを、子ながらも恥づかしと思すらむかしとさばかりの人は思し憚るべきぞかし。されどいと急に、のどめたるところおはせぬ大臣の、思しもまはさずなりて、畳紙を取りたまふままに、几帳より見入れたまへるに、いといたうなよびて、つつましからず添ひ臥したる男もあり。今ぞやをら顔ひき隠して、とかう紛らはす。あさましうめざましう心やましけれど、直面にはいかでかはあらはしたまはむ。目もくるる心地すれば、この畳紙を取りて、寢殿に渡りたまひぬ。尚侍の君は、我かの心地して死ぬべ

く思さる。大将殿も、いとほしう、つひに用なきふるまひの積もりて、人のもどきを負はむとすることと思せど、女君の心苦しき御気色をとかく慰めきこえたまふ。

〔源氏物語〕「賢木」、一四五—一四六頁(11)

困り果てている朧月夜に対して、右大臣は顔色がいつもと違うようだと言かけた。そのとき、薄二藍の帯が女君の御衣にからまつて外に引き出されているのに気づき、また手習いなどがしてある懐紙が御几帳の下に落ちてくるのに気づいた。怪しく思った右大臣は、懐紙をお取りになるなり几帳から中をお覗きになると、臆面もない様子で横になつているのが光源氏だと知つて、心外でいまいましいとは思つたが、そのまま寢殿に戻つてしまわれた。尚侍の君は、茫然と正気も失せて死ぬほどの思いでいらつしやる。大将殿も、「困つたことになつた。とうとういらざるふるまいが積もつて、世間の非難をこうむることになるのか」とお思いになるが、女君のいたわしいご様子をあれこれお慰め申しておられる、と

いうのである。光源氏と朧月夜との密会の現場を押さえた右大臣は、ただちに弘徽殿の太后にこのことを告げ、これによつて光源氏は窮地へと追い込まれることになつてしまふのである。

「尚侍の君は、我かの居心地して死ぬべく思さる」という表現は、『日本書紀』の神話の中で「神退りましき」とあるように、稚日女尊が死去したことを踏まえた記述だとみてよからう。稚日女尊が不慮の死に遭遇したのとは異なつて、朧月夜は命に別状はなかつたものの、その心境は、まさに万死に値する思いだつたというのである。また、光源氏の帯がからまつていたのが女君の御衣であつたとして、衣服が印象

的に用いられているのは、稚日女尊の災難が機織りの場面であったことと関連づけた記述だといえよう。のみならず、光源氏が朧月夜を知ったのは、朧月夜が「御匣殿」であった時とされる（『源氏物語』「葵」の巻、七五頁）。御匣殿とは、内蔵寮とともに帝の御装束の裁縫を掌る女官の長のことで、帝の装束を調達する役職である（12）。朧月夜が御匣殿であったという設定は、明らかに稚日女尊が機を用いて神衣を織っていたことと関連づけてのことと見て大過なからう。

朧月夜はこれによって、入内の機会を逸してしまう。やがては後の位にと期待されながら、それが叶うことはなかったのである。こうした朧月夜の人物設定には、原型となった「稚日女尊」という神名が関与しているのではなからうか。

稚日女尊とは若い太陽の女性の意で、アマテラス大神の別名「大日靈尊」（『日本書紀』巻第一「神代上」、第五段一書第一）に准ずる名だからである。

『古事記』でもほぼ同じ内容の神話が記され、スサノヲの尊の悪行によって死者が発生している。

天照大御神、忌服屋に坐して、神御衣を織らしめし時に、其の服屋の頂を穿ち、天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎて、墮し入れたる時に、天の服織女、見驚きて、梭に陰上を衝きて死にき。故是に、天照大御神、見畏み、天の石屋の戸を開きて、刺しこもり坐しき。

（『古事記』上巻、六三頁（13））

ここではアマテラス大神が天つ神のために御衣を織らせていた時、スサノヲの尊が逆剥ぎの馬を神聖な忌服屋に投げ込み、天の服織女が梭で身を傷つけて亡くなっている。状況は

『日本書紀』の神話に酷似しているが、落命する女性が「稚日女尊」ではなく、「天の服織女」となっていて、『日本書紀』とは明らかに異なっている。「稚日女尊」という神名にはアマテラス大神に準じた境遇が想定されるが、単なる「天の服織女」では朧月夜のように東宮のもとに入内して、やがては中宮にといった人物設定の発想が湧いてこない。ということは、この場面における『源氏物語』の本文は、『古事記』ではなく、明らかに『日本書紀』の神話を源泉として創作されたと考えることができるのである。

五 罪過の祖

朧月夜との密会が露見してしまった光源氏は、右大臣側による政治的謀略によって須磨への流離を余儀なくされるに至る。しかし、これに対して、光源氏は一貫して「無実」を主張している。すなわち右大臣側が謀反の疑いありとして騒ぎ立てる罪状に対して「思ひかけぬ罪」（「須磨」、一七九頁）、思いもよらぬ罪だと主張して憚らないのである。

須磨へ出立する数日前、暇乞いのために訪れた左大臣邸で、光源氏は流離するにあたっての率直な感想を次のように吐露している。

「とあることもかかるとも、前の世の報いにこそはべるなれば、言ひもてゆけば、ただみづからのおこたりになむはべる。さしてかく官爵をとられず、あさはかなることにかかづらひてだに、公のかしこまりなる人の、うつつしまにて世の中にあり経るは、咎重きわざに外国にもしはべるなるを、遠く放ちつかはすべき定め

などものはべなるは、さまことなる罪に当たるべきにこそはべるなれ。濁りなき心にまかせてつれなく過ぐしはべらむもいと憚り多く、これより大きな恥にのぞまぬさきに世をのがれなむと思うたまへ立ちぬる」などこまやかに聞こえたまふ。

〔源氏物語〕「須磨」、一六五—一六六頁

あなるものも、こうなるのも、すべて前世の報いのございますから、煎じつめればただ私自身の宿運のつたなさというものでございます。私のようにはっきりと官位を取り上げられるのでなく、さしたることもない罪に関わっただけでも、朝廷の勘気をこうむり謹慎している者が、平然と普段の暮らしをつづけて月日を送るのは、異国でも罪の重いこととしておるようでございますから、まして私の場合、遠国へ流罪に処すべきご沙汰などもございますので、特に重い罪にあたるのでございましょう。心に何一つやましいことがないのにまかせて素知らぬ顔で過ごしてはおりますが、何かにつけて憚りが多いので、これ以上に大きな恥辱を目にする前に、進んで世の中を逃れてしまおうと思いい立ったのでございます、というのである。

これによれば、光源氏は自分の罪をいささかの軽い罪とし、心に何一つ疚しいことはないが、だからといって素知らぬ顔で過ごすことも憚られるので、これ以上大きな辱めに遭わないうちに進んで世の中を逃れてしまおうと決心した、と言っているのである。つまり、前世からの身の不運、宿業のつたなさは嘆きこそすれ、自分には謀反の罪など決してないことを強調するのである。

また、紫の上に対しても、

過ちなけれど、さるべきにこそかかることもあらめ……
〔源氏物語〕「須磨」、一七二頁

私自身に過失はないけれども、しかるべき因縁があつてこのようなことになるのだろう、と言っている。

ここでも、自分には過失はないと明言しているのである。後に光源氏が須磨に流離していることを知った明石の尼君は、光源氏について、次のように発言している。

京の人の語るを聞けば、やむごとなき御妻どもいと多く持ちたまひて、そのあまり、忍び忍び帝の御妻をさへ過ちたまひて、かくも騒がれたまふなる……
〔源氏物語〕「須磨」、二一〇頁

京の人が話しているのを聞きますと、源氏の君は尊いご身の女君たちを大勢お持ちになつていらつしやるその上に、こつそりと帝の御妻に対してまでも過ちを犯されて、これほど世間で騒がれていらつしやる、というのである。

この発言は都人の語る噂話に基づいている。光源氏が須磨に流離することになった理由を「忍び忍び帝の御妻をさへ過ちたまひて」、つまり密かに帝の妻とまで過ちを犯したためと見ているのである。朧月夜は帝の妻には当たらないので、ここには明らかに事実誤認があるのだが、一般の人々が光源氏の流離を不行跡が高じたために帝の領分を侵犯してしまつた、と受取っていたことが窺われる。

光源氏が、「罪なくて罪に当たり、官位をとられ」（「明石」、二二六頁）「官爵をとられ」（「須磨」、一六五頁）、「流されておはしたらむ」（「須磨」、二二二頁）、つまり謀反の罪

に落とし入れられ、流罪に等しい左遷となつたのには、「さるべきことども構へ出でむによきたより」（「賢木」、一四九頁）とあるように、入内を目論んでいた朧月夜との密会を朱雀帝への謀反と言いなし、騒ぎ立てようとする右大臣方の政治的謀略があつた。それゆえ、光源氏には全く身に覚えのないことなので、この点に關して源氏自身は「思ひかけぬ罪」（「須磨」、一七九頁）「横さまの罪」（「明石」、二四六頁）と一貫して「無実」を主張しているわけである。

こうした光源氏の情況は、光源氏流離の源泉であるスサノヲの尊の流離を想起させずにはおかない。なぜなら、流離にあつて、スサノヲの尊はあらゆる罪過を負わされることとなつたからである。

然して後に 諸 神、罪過を素戔嗚尊に帰せて、科す
るに千座置戸を以ちてし、遂に促め徴る。髪を抜きて、
其の罪を贖はしむるに至る。亦曰く、其の手足の爪を抜
きて贖ふといふ。已にして竟に逐降ひき。

（『日本書紀』卷第一「神代上」、第七段正文）

後に諸神は、罪過をスサノヲの尊一身に歸して、多くの賠償を罰として科し、厳しく督促してついに取り立てた。髪を抜いて、その罪を償わせた。別の伝えでは、その手足の爪を抜いて償わせたという。このようにしてとうとう天上から追放されてしまわれた、というのである。

スサノヲの尊が高天原で犯した罪過の多くは、「祝詞」に記された「罪」と合致している。六月と十二月の晦日によみ上げられた「大祓の祝詞」の中にはスサノヲの尊の罪過の数々が列挙されている。

かく依さしまつりし四方の国中に、大倭日高見の国を安国と定めまつりて、下つ磐ねに宮柱太敷き立て、高天の原に千木高知りて、皇御孫の命の瑞の御舍仕へまつりて、天の御蔭・日の御蔭と隠りまして、安国と平らけく知ろしめさむ国中に、成り出でむ天の益人等が過まら犯しけむ雑雑の罪事は、天つ罪と、畔放ち・溝埋み・樋放ち・類蒔き・串刺し・生け剥ぎ・逆剥ぎ・屎戸、許多の罪を天つ罪と法り別けて、国つ罪と、生膚断ち・死膚断ち・白人・こくみ・おのが母犯せる罪・おのが子犯せる罪・母と子と犯せる罪・子と母と犯せる罪・畜犯せる罪・昆ふ虫の災・高つ神の災・高つ鳥の災・畜仕し、蠱物する罪、許多の罪出でむ。かく出でば、天つ宮事もちて、大中原、天つ金木を本うち切り末うち断ちて、千座の置座に置き足はして、天つ菅麻を本切り断ち末切り切りて、八針に取り辟きて、天つ祝詞の太祝詞事を宣れ。（中略）かく持ち出で往なば、荒塩の塩の八百道の、八塩道の塩の八百会に坐す速開つひめといふ神、持ちかか呑みてむ。かくかか呑みては、氣吹戸に坐す氣吹戸主といふ神、根の国・底の国に氣吹き放ちてむ。かく氣吹き放ちては、根の国・底の国に坐す速さすらひめといふ神、持ちさすらひ失ひてむ。かく失ひては、天皇が朝廷に仕へまつる官官の人等を始めて、天の下四方には、今日より始めて罪といふ罪はあらじと、高天の原に耳振り立てて聞く物と馬牽き立てて、今年の六月の晦の日の、夕日の降ちの大祓に、祓へたまひ清めたまふ事を、諸聞しめせと宣る。

（『祝詞』「六月の晦の大祓」（14）

ここでは、「天つ罪」として「畔放ち・溝埋み・樋放ち・頻蒔き・串刺し・生け剥ぎ・逆剥ぎ・屎戸」を掲げ、「国つ罪」として「生膚断ち・死膚断ち・白人・こくみ・おのが母犯せる罪・おのが子犯せる罪・母と子と犯せる罪・子と母と犯せる罪・畜犯せる罪・昆虫の災・高つ神の災・高つ鳥の災・畜仆し、蠱物する罪」を列挙している。スサノヲの尊が誓約の後に犯した「重播種子」「畔毀」「放屎」といった悪行の数々はここにいう「天つ罪」に相当する。スサノヲの尊は、高天原において数々の罪過を犯すことよって、「大祓の祝詞」にいう「天つ罪」の起源となった。すなわち、スサノヲの尊は「天つ罪」の起源神、「罪過の祖」として理解されていたのである。

そのことを裏打ちする記述が、『日本書紀』にある。岩戸隠れの責任を負わされたスサノヲの尊が、降る雨のなか独り流離する場面である。

時に、霖ふる。素戔嗚尊、青草を結束ゆひつかねて笠蓑かさみとして、宿を衆神に乞ふ。衆神の曰く、「汝は是躬の行濁悪しくして、逐やひ謫せめらるる者なり。如何ぞ宿を我に乞ふ」といひて、遂ついにに同じなに距まく。是を以ちて風雨甚しと雖も、留とりてむこと得ずして辛苦くるしみみつ降る。爾より以来、世に笠蓑かさみを着て他人の屋内うちに入るを諱む。又束草まとくさを負ひて他人の屋内うちに入るを諱む。此を犯す者有らば、必ず解除はらへを償おほす。此は太古の遺法なり。

〔日本書紀〕卷第一「神代上」、第七段一書第三

この記述によれば、世間の人々が蓑笠を着けて他人の家に入ったり、束ねた草を背負って他人の家に入ることを忌むの

は、スサノヲの尊に起源があり、これを破った者には罪や穢れを除くための祓具を出させて賠償を科すのが「太古の遺法」だといっているのである。

スサノヲの尊は、「逐やひ謫せめらるる者かみ」としてありとあらゆる罪過を背負わされ、追ひ払われる存在とされたのだ。すなわち、スサノヲの尊は日本神話の中で「罪過」の象徴的な存在、まさに「罪過の祖」として理解されていたのである。

スサノヲの尊を原型とする光源氏もまた罪と深くかかわってゆく。光源氏はスサノヲの尊が犯した「天つ罪」だけではなく、「おのが母犯せる罪」という「国つ罪」を背負いつづけることとなる。たとえ藤壺の宮は実母ではないとはいえ、光源氏は重い呵責を背負わされ、永く懊悩しつづける人物として運命づけられていった。これもまた、光源氏が「罪過の祖」であるスサノヲの尊をモデルとして造型されたことの何よりの証なのである。

六 罪の二重構造

光源氏に謀反の意図などさらさらなく、全くの言いがかりに過ぎないと見ていた光源氏が、その件に関して一貫して「無実」を主張して憚るところがなかったのは事実である。しかし、だからといって、光源氏が須磨への流離を余儀なくされるにあたって、全く疚しさを感じなかったという訳ではない。光源氏にはみずからがこのような情況に追い込まれる宿運について、内心思い当たることがあったのである。それが深層にある藤壺の宮との隠された罪、いわば「裏の罪」なのである。

須磨への退去を翌日に控えた日、父桐壺院の御陵参拝のた

め北山にでかけた光源氏は、それに先立って藤壺のもとを訪れ、別れを惜しむ。この時源氏は藤壺の宮に向かつて次のように発言する。

「かく思ひかけぬ罪に当たりはべるも、思うたまへあはすることの一ふしになむ、空も恐ろしうはべる。惜しげなき身は亡きになしても、宮の御世だに事なくおはしまさば」とのみ聞こえたまふぞことわりなるや。宮も、みな思し知らるることにしあれば、御心のみ動きて聞こえやりたまはず。

〔源氏物語〕「須磨」、一七九頁

「このような思いもかけぬ罪を蒙りますのも、胸に思い当たる一つあり、空恐ろしく思われます。惜しくもないこの身はたとえ亡きものにいたしましたも、せめて東宮の御代さえ安泰であられますならば」とだけ申し上げなさるのも、まことにごもつともなことである。藤壺の宮もすべてお思い当たりなることなので、ただお心が騒ぐばかりで何も申し上げることがおできにならない、というのである。

ここで光源氏は、謀反の罪そのものではなく、みずからが思いもかけぬ罪にあたるというめぐり合わせを検案してみると、そこには「思うたまへあはすることの一ふし」があることを明確に自覚しているのである。光源氏は公的な罪としての謀反の罪とは別個に、藤壺の宮との間に展開された空恐ろしい罪を人知れず胸に抱えながら須磨へと退去しようとする。ここには誰もが知る公的な罪と心ひとつに抱え込む私的な罪、換言すれば、「表の罪」と「裏の罪」という罪の二重構造を認めることができよう。『源氏物語』は「表の罪」と「裏の

罪」という二重の罪を光源氏に背負わせることによって流離の原因を明確にし、それを同時進行させることによって、須磨への流離という光源氏を受ける人生最大の危機をより劇的なものに仕立て上げることに成功しているのである。

しかしながら、そもそもこの発想はどこから得られたのであろうか。これもやはり『日本書紀』の神話からではなからうか。

実は、スサノヲの尊が斑馬を逆剥ぎにして斎服殿の中に投げ入れたとする神話には異伝があり、『日本書紀』の正文では梭で身を傷つけたのが稚日女尊ではなく、アマテラス大神自身であると伝えているのである。

天照大神の方に神衣を織りて斎服殿に居しますを見て、
すなは、あまのふちこま、さかほさき
則ち天斑駒を剥にし、殿の裳を穿ちて投げ納る。
是の時に、天照大神驚動き、梭を以ちて身を傷ましめた
まふ。此に由りて発愠りて、乃ち天石窟に入りまし、
磐戸を閉して幽居す。故、六合の内常闇にして、昼夜の
相代も知らず。

〔日本書紀〕卷第一「神代上」、第七段正文

アマテラス大神が丁度神衣を織って斎服殿におられるのをスサノヲの尊が見計らって、天斑駒を逆剥ぎにし、御殿の屋根に穴を空けて投げ入れた。するとその時、アマテラス大神は驚かれ、機織の梭で突いてお身体を傷つけられた。このことで、アマテラス大神は激怒され、天石窟に入れられ、磐戸を閉じて籠ってしまわれた。それゆえ、国中が常闇となり、昼と夜との交代の区別も分からなくなってしまうた、というのである。

これによれば、逆剥ぎにした天斑駒を齋服殿の屋根に穴を空けて投げこんだのはスサノヲの尊にほかならないが、齋服殿で神衣を織っていたのはアマテラス大神自身であり、逆剥ぎにした天斑駒が投げ込まれたために驚き、機織の梭で身を傷つけたのもアマテラス大神自身ということになっている。つまり、稚日女尊が不慮の死を遂げたという先の神話とほぼ同じ内容でありながら、その被害に遭った神が異なっているのである。

ここにアマテラス大神が登場し、アマテラス大神自身がスサノヲの尊流離の直接的な原因になっているということは、大きな意味をもつていよう。スサノヲの尊のふるまいがすべてアマテラス大神と関わっていたように、光源氏の乱行もまた藤壺の宮への思慕を背景としていたからである。スサノヲの尊がアマテラス大神に関わる聖なる禁忌を冒し、高天原の秩序を混乱したように、光源氏は藤壺の宮への思慕をそもその原因とする禁忌を侵犯し、宮廷社会の秩序を混乱していたのである。

紫式部はここにスサノヲの尊流離の真相を見たのであった。スサノヲの尊がなしたすべての悪行は、アマテラス大神に向けてのもの、アマテラス大神に当てつけてなされた行為にほかならない。それを明白にするのがこの神話である。紫式部はこのことを深層に置き、朧月夜との一件を表層とする罪の二重構造を仕立て上げようとしたのであった。

『源氏物語』において、光源氏が流離することになった理由には二つの罪が関わっていた。朧月夜事件という「表の罪」と藤壺の宮事件という「裏の罪」である。光源氏は藤壺の宮との一件を内包しながらも、表向きは朧月夜との罪の贖罪として須磨へと流離する。紫式部は『日本書紀』の神話の「正

文」と「一書」という二つの異伝を二つながら源泉として踏まえることによって、罪の権化であり、「罪過の祖」であるスサノヲの尊を平安の世に甦らせたのであった。

『源氏物語』には、スサノヲの尊の所業によってアマテラス大神が身を損なってしまうというこの神話に基づいた場面が描かれている。光源氏が密かに藤壺の宮の寝所に迫ったため、驚き慌てた藤壺の宮が胸をつまらせ、上気し、ついには倒れてしまうという場面である。

まねぶべきやうなく聞こえつづけたまへど、宮いとこよなくもて離れきこえたまひて、はてはては御胸をいたうなやみたまへば、近うさぶらひつる命婦、弁などぞ、あさまじう見たてまつりあつかふ。

〔源氏物語〕「賢木」、一〇七—一〇八頁

源氏の君はとても筆に尽くし難いようなお言葉を綿々と申し上げなさるけれど、藤壺の宮はまったく受け答えなさらず、ついにはお胸がひどく痛んでお苦しみになるので、近くにお仕えしていた命婦や弁などが驚き慌ててご介抱申し上げます。

宮はものをいとわびしと思しけるに、御氣あがりて、なほ悩まじうせさせたまふ。兵部卿宮、大夫など参りて「僧召せ」など騒ぐ……

〔源氏物語〕「賢木」、一〇八頁

藤壺の宮は何もかもがひどくつらいとお思いでしたので、上気なさって、いっそうお苦しみになられる。兵部卿宮や中宮大夫などが参上して、「僧を呼びなさい」などと騒いでい

る。

「なほ、いと苦しいこそあれ。世や尽きぬらむ」

〔源氏物語〕「賢木」、一〇九頁

「まだひどく苦しい。私の命は尽きてしまったのでしょ
うか」。

宮は、なかばは亡きやうなる御気色の……

〔源氏物語〕「賢木」、一一二頁

藤壺の宮はなかば死んだ人のようなご様子だった、とい
うのである。

機織の梭で身体を突き、傷つけるといふ行為が稚日女尊を
死に追いやったように、アマテラス大神にあたる藤壺の宮は、
心に大きな傷を受け、瀕死の苦痛を負わされることになる。
ここには明らかに神話に基づいた場面が描かれ、藤壺の宮の
危機的な情況が描かれているのである。

一方夜が明けてもそのまま退去しなかった光源氏は、人目
につかぬように塗籠の中に押し込められてしまう。塗籠とは
周囲を壁で塗り固めた納戸のことで、主に衣服や調度類を納
めるのに用いた閉鎖的な空間であった⁽¹⁵⁾。ここではアマテ
ラス大神に当たる藤壺の宮ではなく、光源氏自身が天石窟な
らぬ塗籠に押し込められてしまっているというのだ。

君は、塗籠の戸の細目に開きたるを、やをら押し開けて……

〔源氏物語〕「賢木」、一〇九頁

源氏の君は、塗籠の戸の細目に開いているのを、そっと押
し開けて、というのである。

この一節は、アマテラス大神の岩戸隠れの神話を連想させ
る。

細めに磐戸を開けて窺ひたまふ。

〔日本書紀〕卷第一「神代上」、第七段正文

アマテラス大神は、細目に磐戸を開けて外をうかがわれた、
というのである。

光源氏は、塗籠の戸を押し開けて、真つ暗な塗籠を出て、
「昼の御座」にいる「輝く日の宮」藤壺を仰ぎ見る。紫式部
は、岩戸隠れへとつづくこの場面、本来の立場を逆転させ
ることによって、神話を踏まえたことによる物語の面白さを
存分に引き出しているのである。

それは、衣服に関する表現にも窺うことができよう。塗籠
に逃げ込んだ光源氏のお召し物のあれこれを人目につかぬよ
うに女房たちが隠し持つて、御衣の処置に困惑したり、塗籠
から抜け出した光源氏が、再び藤壺の宮に迫り、藤壺の宮の
御衣を引き寄せた時、その御衣を脱ぎすべらかして逃れよう
とする藤壺の宮の御衣を源氏が握つたりと、衣服に関する表
現が目立つのも、この場面が斎服殿において神衣を織ってい
た際の神話が基になっていることを暗示した表現だからにほ
かならない。

スサノヲの尊の悪行によって、その身を傷つけることとなっ
たアマテラス大神は激怒し、天石窟に入ることを決意する。

このアマテラス大神の岩戸隠れに相当するのが、藤壺の宮
による突然の出家である。

度重なる光源氏の危険な来訪によって、その秘密が世間に知られることを畏れた藤壺の宮は、中宮の位も退き、世をそむき尼になることを決意するのであった。

故桐壺院一周忌の法要に引き続いて催された法華八講の果ての日、藤壺の宮は突如として落飾する。

最終の日、わが御事を結願にて、世を背きたまふよし
仏に申させたまふに、みな人々驚きたまひぬ。兵部卿宮、
大将の御心も動きて、あさましと思す。親王は、なかば
のほどに、立ちて入りたまひぬ。心強う思し立つさまを
のたまひて、果つるほどに、山の座主召して、忌むこと
受けたまふべきよしのたまはず。御をぢの横川の僧都近
う参りたまひて御髪おろしたまふほどに、宮の内ゆすり
てゆゆしう泣きみちたり。

『源氏物語』「賢木」、一三〇—一三一頁

最終の日に、藤壺の宮はご自身のことを結願として出家あそばす由を仏に申し上げられたので、人々はみな驚愕なされた。兵部卿宮や大将のお心も動転して、思いもよらぬこととお思になる。兵部卿宮は御法会の途中で席を立てて宮の御簾の中にお入りになった。宮は、堅い決心のほどを仰せられ、御法会の終るころ、叡山の座主を召して戒をお受けになる由を仰せになる。御伯父の横川の僧都がおそば近くに参上なさって、御髪をお下ろしになる時には、御殿の内が揺れどよめいて、忌まわしいまでに泣き声が満ち満ちた、というのである。

藤壺の宮は決然として出家し、髪を下ろす。『源氏物語』
中屈指の劇的場面である。突然の事態に、居合わす人々は驚

き、どよめき、辺りは忌まわしいまでの泣き声に満ちあふれる。この場面こそ、アマテラス大神の岩戸隠れを彷彿とさせる場面なのである。

以上のように、『源氏物語』の作者紫式部は、二つの神話を活かし、「表の罪」と「裏の罪」という罪の二重構造による物語を創作したと考えられる。二つの神話を源泉として同時に用いるということは、『源氏物語』の中でも唯一の例であり、このように二つの神話を罪の二重構造に改変するといふ妙手によって、『源氏物語』は「罪の物語」としての性格をいやがうえにも印象づけることに成功したといえよう。その意味で『源氏物語』は、貴種流離譚が本来「罪」と深く関わることを改めて如実に披瀝した、貴種流離譚の典型的な作品であったと結論することができるのである。

注

- (1) 杉浦一雄「源氏物語の源泉」(『千葉商大紀要』第三十七卷第四号、平成12年3月)
杉浦一雄「源氏物語と根の国」(『千葉商大紀要』第三十八卷第一号、平成12年6月)
- (2) 『古今和歌集』の本文は、『新編日本古典文学全集』(小学館)に拠る。ただし、後人のものとされる所謂古注は省略した。
- (3) 杉浦一雄「源氏物語と聖徳太子伝暦」(『千葉商大紀要』第四十六卷第一・第二合併号、平成20年9月)
- (4) 『日本書紀』の本文は、『新編日本古典文学全集』(小学館)に拠る。
- (5) 杉浦一雄「源氏物語と物語の起源」(『千葉商大紀要』第

三十八卷第二・第三合併号、平成12年12月)

〔付記〕

- (6) 西村亨「貴種流離譚とその周辺」(『文学・語学』一〇五号、昭和60年5月)、『折口名彙と折口学』昭和60年、桜楓社)

- (7) 杉浦一雄「源氏物語と総合」(『千葉商大紀要』第四十四卷第一号、平成18年6月)

杉浦一雄「源氏物語と物語史」(『千葉商大紀要』第四十四卷第二号、平成18年9月)

- (8) 『竹取物語』の本文は、「新編日本古典文学全集」(小学館)の『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』に拠る。

- (9) 『伊勢物語』の本文は、「新編日本古典文学全集」(小学館)の『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』に拠る。

- (10) 阿部秋生『源氏物語研究序説』第二編第一章第二節「須磨下向の准拠」(東京大学出版会、昭和34年)

- (11) 『源氏物語』の本文は、「新編日本古典文学全集」(小学館)に拠る。

- (12) 石村貞吉『源氏物語有職の研究』(風間書房、昭和39年)

(13) 『古事記』の本文は、「新編日本古典文学全集」(小学館)に拠る。

- (14) 『祝詞』の本文は、「日本古典文学体系」(岩波書店)の『古事記 祝詞』に拠る。

- (15) 池田亀鑑『源氏物語事典』上巻「語彙編」(東京堂出版、昭和35年)

本稿は、本学名誉教授江口泷先生との共同研究「貴種流離譚と再生」による成果の一端である。共同研究に際しては、本学より平成十九年度学術研究助成金の交付を認可された。改めて、ここに学長をはじめ関係各位に対し厚く謝意を表する次第である。

[抄録]

本稿は、平安時代における貴種流離譚の集大成としての『源氏物語』が、貴種流離譚の原型であるスサノヲの尊神話を踏まえ、それを物語として昇華させていった過程を、罪の側面から明らかにすることを目的としている。

貴種流離譚の原点を尋ねれば、『日本書紀』の神話に登場するスサノヲの尊に行き着く。スサノヲの尊は、和歌の祖・異郷の祖・物語の祖であるばかりでなく、流離の祖・罪過の祖としての側面をもっている神である。そうしたスサノヲの尊を踏まえることよって成立した『源氏物語』は、光源氏の流離を創作するにあたってスサノヲの尊の罪と流離を下敷きにしていたはずである。それゆえ、光源氏の流離に罪が不可避の問題となっているのは、その原点に罪過の象徴的な存在としてのスサノヲの尊が踏まえられているからにはかならない。その上、光源氏の流離には朧月夜にかかわる表層の罪と藤壺の宮にかかわる深層の罪という二つの罪が関わっているが、この設定にはスサノヲの尊をめぐる神話とその異伝とを源泉として二重に用いるという作者の優れた工夫が隠されているのではなからうか。このように二つの神話を罪の二重構造に改変するという妙手によって、『源氏物語』は罪の物語としての性格をいやがうえにも印象づけることに成功したといえよう。その意味で『源氏物語』は、貴種流離譚が本来罪と深く関わることを改めて如実に披瀝した、貴種流離譚の典型的な作品であったと結論することができるのである。